

## 世界精神医学会イスタンブール大会に参加して

上原 久美, 館農 勝, 高橋 英彦, 杉浦 寛奈  
(日本若手精神科医の会 (JYPO))

2006年7月12日から16日の5日間, 世界精神医学会 (World Psychiatric Association, 以下, WPA) 国際大会総会がトルコのイスタンブールで開催されました。Uniqueness and Universality (独自性と普遍性) というテーマのもと, さまざまな民族や国籍の精神科医が一堂に介し, 大変充実した学会でした。一方, 若手精神科医の育成や研修の必要性が指摘される昨今, 多くの学会において若手精神科医による/若手精神科医 (以下, 若手) のための活動が開催されるようになり, 本学会でも WPA-Young Psychiatrist Council (若手協議会, 以下 YPC), 若手精神科医・精神科研修医世界連合, WPA フェロープログラムなど若手のための活動が数多く開催されました。

今回, 我々日本若手精神科医の会 (JYPO) のメンバー5名がこれらの企画を通じて世界各国の若手と交流する機会をもつことができましたので, ここにご報告します。

### 1. 国内外の若手精神科医の団体と活動について

#### WPA-フェロープログラムについて

WPA-フェロープログラムは若手精神科医の参加を促すべく始まったプログラムで, 40歳未満または精神科研修終了後5年未満が対象となります。WPAの総会ごとに各国から1名, WPA Zoneと呼ばれる18の地域から各1名推薦され, 「フェロー」として参加します。フェロープログラムに参加すると, 研修や交流の場を与えられるだけでなく, 宿泊や交通についての援助も受けることができます (報告後述)。

#### WPA-YPC (若手協議会) の活動について

WPA-YPCは2005年のWPA総会・カイロ大会から活動が本格化した, 加盟各国を代表する若手の集まりです。WPA-YPCメンバーは, 2度のWPA総会を通じて, つまり, 3年間継続的にその任務を勤めることとされています。今回のイスタンブール大会では, およそ30名のWPA-YPCメンバーが, フェローとともに, 会議や症例検討会などの研修プログラムに参加しました。WPAでは, 3年毎に開催される総会の他, その間の2年間は毎年WPA国際会議が開催されますので, 1年に1度は世界各国の若手が一堂に会する機会が設けられることとなります。さらなる交流の活性化を目的にインターネットを利用したネットワークの設立準備が始められ, ますます活動が盛んになると期待されます。(館農 勝, 砂川市立病院, 1997年卒)

#### World Association for Young Psychiatrists and Trainees (WAYPT) の活動について

WAYPT (若手精神科医・精神科研修医世界連合) は, 2000年の米国精神医学会 (APA) シカゴ大会の際に, 世界各国の若手精神科医・精神科研修医の交流を目的とした団体の設立が提案され, その主旨に賛同した各国の若手精神科医がその後の国際学会での再会等を通じて交流を深め, 自主的に設立した任意団体です。2003年5月にAPAサンフランシスコ大会で第一回会議が行われ正式に発足して以来 (Psychiatric News, Vol. 38, No 12, p. 16, 2003), 年に1度の総会の他, インターネットでの情報交換を中心に活動していま

す。今回、初の試みとして展示ホールにWAYPTブースを設置し、パンフレットの配布や活動紹介を行い、40名以上の新規メンバーを迎えました。今後も、WPA関連学会やAPA総会に合わせて会議を開催していく予定です。詳細は、<http://www.waypt.org.uk/>を（館農 勝）。

### Japan Young Psychiatrists Organization (JYPO) の活動について

JYPOは2002年横浜で開催された世界精神医学会・日本精神神経学会をきっかけに若手精神科医育成を目的に発足し、現在全国の会員とともに、国内外における精神医療に関する研究、研修、交流など多くの活動をしていますので、その一部をご紹介します。

研究を企画・実行し国内外で報告する技術を習得するため、毎年The Course for the Academic Development of Psychiatristsという企画があります。全国から集まった30人前後の若手が、国内外から著名な先生方をお招きし、合宿形式で研修します。研究や英語での発表の手法を学ぶことは勿論、世界における日本の精神医療の位置づけを知り、また全国各地の参加者と交流することができます。この他に臨床や研究に役立つ医療統計や症状評価尺度の研修も行っています。これらの活動から、受診経路の研究、卒後教育に関する意識調査、精神医療の地域比較、うつ病治療戦略に関する意識調査など様々な多施設研究が立ち上がり、国内外の学会で毎年研究・活動報告を行っています。また、本学会のように各国の若手精神科医らと国際シンポジウムやワークショップを行い、意見交換・交流を行っています（上原久美、横浜市立大学、2000年卒）。

## 2. WPA イスタンブール大会の参加報告

### フェロープログラムに参加して

今回の世界精神医学会イスタンブール大会は、2002年横浜大会で“ホーム”のフェローに選出されて以来の参加です。WPAでは、横浜大会から若手向けのフェロープログラムに力を注ぐよう

になってきて、その内容も進化してきています。今回、私は東アジア枠でフェローに選出され、“アウェー”として参加してきました。日本代表枠としてきている横浜市立大の上原久美先生とあわせて日本人は2名でした。アフリカ、中東、（東）南アジアといった発展途上国で、精神保健も十分整備されていない国から先進国まで、様々なバックグラウンドの精神科医が集まって、症例検討など（後述）を通じて各国の精神保健の問題について意見交換をしたり、継続的な交流を目指したりするプログラムです。夕方以降は、トルコ人フェローの案内でビルの屋上からモスクが眺められる居酒屋や川辺の素敵なレストランなどに出向き、夜遅くまで楽しい時間を過ごしました。今回を含め、今までこうして各国の若手と交流を持って見識を広げる機会に恵まれたのもJYPOの活動があったからこそで、その活動を支援して下さった日本精神神経学会には深く感謝したいと思います。私もJYPOでは若くなくなってきました。深夜まで酒を飲むと翌朝、だんだんきつくなって来ています。来年メルボルンで彼らと飲み明かせる若い先生に期待します（高橋英彦、東京医科歯科大学、1997年卒）。

### フェロープログラム、症例報告に参加して

本大会の大変興味深い企画として、フェローによる症例検討会が挙げられます。日常診療で経験した症例を若手が提示し、それを小グループで検討、その文化的背景に至るまで討論する企画です。この症例検討を通し、精神疾患の背景や治療がその文化的背景や医療事情により異なることを実感する一方で、環境調整が困難な症例、処遇困難例の問題など共通する課題もあることを感じました。この症例検討ではまた、ICD-10に多軸診断の要素を組み込んだ包括的診断法であるInternational Guidelines for Diagnostic Assessment (WPA) が用いられており、社会背景やQOLの尺度まで取り入れられた新しい診断法を経験することができました。

日本からは小児の強迫性障害の症例を提示し、

文化的背景や治療法について述べた後に治療法についてさまざまな意見を頂戴しました。討議の中でご提案いただいた薬物がいずれも日本で認可されていないものであったことは残念でしたが、症例へのアプローチの仕方など大変勉強になりました(上原久美)。

WPA International Congress イスタンブール大会でのワークショップに参加して

韓国の Dr. Han の協力を得て、18に分けられる WPA Zone のうち、Zone 17・東アジアに属する4ヶ国/5団体(中国/香港、韓国、台湾、日本)の若手の交流や意見交換を目的として“Recent trends in pharmacotherapy among young psychiatrists in East Asia”と題したワークショップを開催しました。香港の Dr. Waichi Chan, 韓国の Dr. Changsu Han, 台湾の Dr. Erin Wu, そして日本からは上原久美先生の4名が発表を行いました。多剤併用の現状、患者数の多さに起因する1人あたりに費やせる診療時間の問題、多施設を経由しての受診経路に関する問題など、東アジア各国に共通した問題やその国特有の課題が浮き彫りになり、欧州からの聴衆を巻き込んだの活発な討議が行われました(館農 勝)

はじめて WPA に参加して

イスタンブールにて WPA が開催され、これに参加する機会を頂きました。私にとって精神科医として初めて参加する学会であり、大きな刺激となり、精神科医としての今後の方向性、目標に大いに参考になりました。世界のあらゆる地域から参加者があり、著名な精神科医から Young Psychiatrists Council を中心とした若手と年齢層も幅広く、話題興味も多岐にわたりました。世界標準の治療を学び、明日の診療から役立ちそうな点も含め非常に参考になりましたが、合わせて、国際保健としての精神科医療や国際貢献に興味のある私としては、世界の精神科事情を知る機会に恵まれたことや、実際にそれらに取り組む精神科医の活動を知ることができたのは大きな収穫でした。この情報を今後も掘り下げていく姿勢を持ちつつ、日々の診療に邁進し臨床医として成長したいと思います(杉浦寛奈, 横浜市立大学, 2003年卒)。

このような貴重な機会をくださった世界精神医学会の先生方、秋山剛先生、新福尚隆先生、山内俊雄先生はじめご推薦してくださった日本精神神経学会の先生方、日ごろ活動をご理解いただき、ご指導くださっている全国の先生方にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

—〈2007. 1. 13 受理〉—